

八月の砂地

おわるのだなあ

国をなくしたいのだが
いのちをなくす時が近い

国をなくす
国のない光景

いつか見たのだ
焼けた八月の砂地

詩を

群

青

歌う
子供たちの記憶に入り込む

おわかれです

おわかれです
ほとけさまのようにあなたは
やわらかく
そこにいて
ぼくはみをひいていきます
いくさをどうすることもできずに

あのひのしずかなひでりが
むかえにきています
わずかないくさのあいま
すなちにひからびたかぼちやがころがる
はてしないひとりの
おひる

あれがじゆうそのものでした
おやもいえもまちも

にほんこくも
こげていました

やはり
そこからはじめるのです

さようなら
いきているつながりたち

舗装されていない駐車場に水たまりができた

すずめが水浴びをする
からすが水を飲む
ぼくも体をひたす
水たまりにはいろいろな生き物がある
どれもひよろ長い体をしている
蛭やゴカイやミミズやヒトデや子蛇に似ている
濃い緑色の底が動いている
澄んだ水のなかで泳ぐ
手を伸ばす

さようなら

夏の朝の雲と空
あと数年分の雲と空に胸を開く

言葉を

託す

だれかが読んでくれる

メリーゴーランド

戦場をめぐるメリーゴーランド

戦争といつもいた

もう少しあるぼくの時間

底の広場に降りていく

おとこから

おさめてくれ

おんなたち

じつとして

ほら 脈を打っている
とも 脈打っている
隙間のない
優しい
鞞 静かに
たしかに
みちている
響いている
深く遠くまでも
揺れ
震え
いのちが
横たわる
やすらいでいる

痛みは痛みのまま
苦しみは苦しみのまま
悲しみは悲しみのまま
漂う
いたわる

ずつと朝だ

文化

リズムが
枠を組む
こきゅうやみぶりを
統べる
鼓動もだ
言葉も
生活もだ
法律と同じだ
もう終わりにしよう

勇氣

徴兵から逃げおうせた男を知っている

死亡届を出して姿を消した男を知っている
中国人を殺さなかつたが戦死した男を知っている
兵にはならぬと牢屋で飢え死んだ人たちを知っている

神も仏も砲弾になり
攻撃したり自殺していた
その時にだ

この手で

細い黒縁の眼鏡をかけた
無口な大佐が町にもどってきた
近所の同じ年ごろの男たちは戦場に行ったままで
戦傷除隊になつたものと結核と精神病の患者が何人か残っていた
大佐は車で屋敷にはいつた
表には出てこなかつた
二十年の七月

藤野勝男は特高につかまり南方に送られた
片目をつぶして帰つてきた
縄ない

竹細工

一刀彫りで暮らした

しめ飾りが得意で

橙が見栄えした

数人の男と女が一緒に作業した

戦争に負けた日

大佐の屋敷から火が出た

藤野たちは切腹しかかった大佐を引きずりだした

天皇に申し訳ないとばかりいった

町のものは大佐のやけどの手当てをした

火が収まりみんないったん引きあげ

藤野は大佐を預かった

みんなに謝れんのか

声が聞こえた

大佐の声は聞こえなかった

おれたちに何をしたか

謝りもできんのか

夜遅く藤野は

しきりに手を洗っていた

九月に近いある日

占領軍のアメリカの憲兵と日本の警察が
大佐を捕まえに来た
大佐の姿はなかった
半分焼け残った家には
誰もいなかった

戦犯で処刑されたろうに
どこにいったんやろ

町の人はそのうばかりだった

骨

心地よい
揺れる水面
このまま
流れにのらず

玄室をしつらえている
つまと
砂場で遊ぶ

すずめや虫たち
草や花を眺めたり抜いたり
小山をつくつたり
並んで砂を掘っていたことももういない
朝の光

深く掘って埋めた大きな犬は穏やかだった
この家では人はだれも死んではいけない
いなくなつただけだ
増える孫が空にぼくを押し上げる
星なんかにはならないよぼくは
東洋の砂浜の砂粒になりたいんだ
海にも波にも風にも陽射しにも
ずつと友がいて
話をするんだから

どこへ帰ろうか

親きようだいとは別れた
寺や墓地には近寄らず
どこかへ行きたい

どこに行つてもおんなじことす
といわれても
終わらないものを引きずつて
歩く

罪が深すぎる西の方
埃たつ犬の糞だらけの東
欲望の死骸がほったらかさ
れている南
踏みつけられ今日も北

列島に這い上がつて
罪を使い果たし
海にもどつていくぼく
西方丸クルージング
血色のたぎる海で骨になる

歌つてくれたんですね

よかつた
底のほうで

ずっと知り合いだったような

文字は声から

声は周りから

ひびきあわなければ

死んでいく

詩も

声そのもののなかにいたい

あんとと J A Z Z

焼けた太陽が転がる

めくれたベニヤ張りの扉を開ける

足を入れる

とろりと昨日が寄りかかってくる

奥の薄暗がりに

歯をむき出しにしたあんたの顔

ベースに指をかけたまま

崩れ落ちた

働きずくめだった

いつ死んでもいい

夢なんかいいよ

こうして生きてこられた
それだけだ

酒と眠り薬

ジャズだか

ブルースだか

どこかの町の音頭だか

口あけて

目玉を天井に向けて

すつかり鼻の穴を開いて

うなる

ぼぶん ぼぶん

弦をなでる太い指

さあ声をくれ

あたしに催促

あたしは短く吐息

いぞ

そう
もつと
声じゃない
音でもない

そう
そうだ

吐け

静かに

深く

ゆっく
り

叫ぶな

吐け

息だ
息と一緒に
おまえの奥底を

あんたは
相変わらず
天井を見つめる

うん
いい

おまえの息は

いい

土から

海から

ああ

町から

やつらを

集める

おまえの息は

甘い

甘い霧だ

魂をなで

悲しみを抱き寄せる

あんたはもういない

知り合いもへった

でも

あんたもそいつらも

そこにいて

ごそごそしている

足で床を打つ

土を叩く
壁をぶつ
容赦しない
もつと蹴る
あんたら起きなよ

さあ立って
おいでなさい
取っ組み合いだよ
さあ
かかっておいで
あたしは容赦しないよ

どう？
気持ちいいだろ？
取っ組み合いっていいだろ

あたしは夢を見続ける

ジャズは油くさい波
朝早いごみ集めのひとや車やエンジンの真つ最中
街の踊り子たちはまだ夢のダンスの真つ最中

目いっばい
駅にも街角にも
別れが群れている
ペットが果てしない
憧れを吹く
バーボン漬の夢

夢が吐き出されたものを食う
夢は目をむいて笑う
むくむく空を覆う

店が
伸びたり縮んだりする

膨らんで
雲になる

ただど番地は変わらない
この土を離れない

あたしの夢だよ
一緒においで

広がるよ
空いっばいに

あたしはあたし
新しいあたし

あなたたちも新品

扉をあけてさあ入っておいで
新しいお客さん

棺桶から

空いつぱいの
刈のすんだ稲田の中に立つ
薄い羊雲が高い
東に金いろのひかり
秋が終わる朝

四方は低い山
すべては空
空からすくわれ
そのまま宙に浮いている
仰向けに
あたりの息吹が
生命の存続と終わりを教えている

言葉が果てた

広々とした棺に横たわっている

低い山

稲が終わる田

小川

小道と大きな道

群れる草

赤い花の溜り

ささやかな木立

民家や商家

作業小屋

老人たちの家

小型の車

歩く人

黒い鳥

白い鳥

すばしこい小鳥

甲高い鳴き声

くぐもった声

露の滴り

濡れた芝

ちらばる椎の実
目覚めたばかりの赤子の声

資本主義のなか
宙吊りの棺

黙りこむ欲望

風に吹きやられる本と音楽
うつろな映像

洗濯機が軽快に回る

すべてを混ぜ込んだフライパン

埃とごみとのおしゃべり

皮膚を削いでいく温水シャワー

退避壕のつもりスピリッツ

食べながらつぶやく
眠りの細道パソコンドーム

言葉を連ねる

糠みそ漬けの時間を取り出す

どんぶりがいくつもいる

食っては漬ける

せめて戦争を邪魔する

次々に出産

生まれて半年にもならない子供を抱えて
三十前後の女たちが
つぎつぎにやってくる
腰を据えて赤子を抱いた女たちは
むくんだ顔を微笑ませ
いつかのはりはやわらかい曖昧さになり
こちらを向かせようと
赤子をゆする
産休の女たち
周りがあやす腕を差し出す
身を硬くして泣き出す赤子
薄いゆつくりした時間のローブの母親
母親は母親の時間にしたがっている
あの空を見たい
あの広さの中に立ちたい

この季節が終わらぬうちに

宙に浮き
そのまま抱きとられたい

夕暮れ近い海に砕け散る光

湿気を帯びた島影

おだやかな波

柔らかな水平線

あの空は浮かせてくれる
抱きとつてくれる

暮らしているこのさまのまま
殺し合いのいまのまま

どうしても変わらないんだね

変わってくれ
どれだけ長い間言い続けてきたか
ぼくらを愛しているのなら

なにがなんでも
変わつてくれ

時間がない

遠ざかるだけだろう 今のままでは

ぼくらをしっかりと見るんだ

激しい毎日だろうが

何かに引つ張られて意志をなくして

幻を追うみさかいのないきみ

楼閣にしつらえられた海のようなベッドのうえで

賞賛の嵐にこたえ

盃を挙げ快樂に身を投げる

きみ

みずからを変えることのできない

悲惨なきみ

美しくなるたびに

人が死ぬ

墓地街のきみ

子供たちを兵士にしたてる

せめて

サボタージュ
戦から逃げる
国を捨てる
駒にならない